

[遺族] 西 朋子 氏 (昭和 62 年 (当時 16 歳)、兄を交通事故で失う)

[要旨]

○当時の状況

私は、三人きょうだいの末っ子です。亡くなったのは2番目の兄、1歳違いでした。兄のことを人前で話すのは本日が初めてです。兄がこの世に存在したこと、そしてきょうだいの存在について少しでも皆さんに聞いていただきたく、本日はお話をさせていただきます。

兄が亡くなったのは、ちょうど私の16歳の誕生日でした。その年から私の誕生日は兄の命日となり、30年以上経った今でもお祝いをするをあまり嬉しく感じたことはありません。兄と私はとても仲良くて、私は兄が大好きでした。私は父母、兄2人と私、それから祖母、叔父、叔母の9人というたくさんの家族に囲まれて育ちました。

兄が事故に遭ったのは亡くなる5日前の夜のことで、警察から電話がかかってきた時に私が電話を取りました。救急車で運ばれたと聞き、父にすぐ電話を替わりました。両親がすぐに病院に行き、最初は「大したことないだろう」ということだったのですが、緊急手術をすることになり、私は状況を理解できず祖母と一緒に電話の前で寝ました。脳挫傷、脳死、もう一生目を覚ますことはないと言われ、兄に会いに病院に行きました。

兄はバイクで二人乗りの後ろに乗っており、交差点で出会い頭に酒気帯び運転の女性の車とぶつかりました。当時はまだ酒気帯び運転について法律もなく、警察の方も「運が悪かった、仕方ないよね」という感じの対応でした。私は母と交代でお見舞いの対応などしましたがその間の記憶はほとんどありません。この5日間のただ一つの記憶は、相手の家族が「うちのこどもも苦しんでいます」と脳死の兄の病室で言い、母が怒って相手の家族を病室から追い出したことだけです。相手の女性は、病院には一度も来られませんでした。

5日間、家族で今後のことについて話をし、兄の命を誰かの役に立てられないだろうかということで、愛媛県で初めて未成年の臓器移植をさせていただきました。そのことが新聞に掲載されたことが、我が家の地獄の始まりとなりました。

○事故後の家族の状況

私にとって唯一の救いと言えるのは、叔母が焼き場で私に寄り添ってくれたことです。お葬式でも病院でも、「あなたがしっかりしないと」と言われました。学校に登校しても、腫れ物のように無視をされて孤独でした。

当時大学生だった一番上の兄はもっと苦しかったと思います。自分の道があっただろうに家業を継ぐことになり、「長男として」という言葉がのしかかっていたと思います。

母は、兄の友人の母親から臓器移植をしたことを罵られてうつ気味になり、亡くなった兄の部屋で自殺未遂をしました。「紐が切れちゃった」と泣く母の姿は、今でも忘れられません。その時、私は母に、「苦しいだろうけど、私や一番上の兄のために生きてほしい」と伝えました。ただそれ以来、「死んだのが私だったらよかったのに」ということを、30代後半までず

っと引きずりました。

今、私は、病気のあるお子さんとそのご家族の支援をしています。小児癌等の病気で亡くなったお子さんのご家族や、闘病中のお子さんとそのご家族と接する中で、「きょうだい支援」に出会いました。その支援について聞いた時、「自分のすべきことはこういうことなのではないか、兄が教えてくれたことはこれなんだ」と自分の中でストンと落ちてきたことを覚えていています。

○今、伝えたいこと

当時、苦しかった時にあったらよかったと思う支援は、交通事故で亡くなったこどものきょうだいの会です。とにかく気持ちを聞いてくれる場所があったらよかったと思います。それから、私に説明をしてくれなかった警察関係の方々に少しでも声を掛けてほしかった、病院や警察の説明を家族と一緒に聞きたかったと思います。

今、同じようなきょうだいに伝えたいことは、私たちは私たちの人生があるんじゃないかということです。亡くなったきょうだいと自分とは別の人間で、「あなたの命はあなたのもの」ということを感じてほしいと思います。でも、私もずっとそうであるように、やっぱりきょうだいのことは忘れないで一緒に生きていけたらいいと思います。

こどもたちの周りにいる人に伝えたいことは、「亡くなったきょうだいの分までは、頑張れません」ということです。「話したくなったら聞くよ」と言ってもらえる、とにかく抱きしめてくれるだけでいいのではないかと思います。本当はとても不安です。頑張っても頑張ってもそれがなかなか形にならなかったり、自分がこれで正解なのかと常に不安に感じています。「兄だったらどうだったのかな」と、常に私は考えました。

これからも兄とともに、しっかり「きょうだい支援」に取り組んで行けたらいいなと思っています。そして、私のようなお子さんたちの話を聞けたらいいなと思っています。